

幼児期を対象としたメンタルヘルス教育プログラムの効果評価

篁宗一^{*,1)}、清水隆裕¹⁾、李載徳²⁾、大島巖²⁾、桶谷肇³⁾、

¹⁾聖隷クリストファー大学、²⁾日本社会事業大学、³⁾NPO 法人地域精神保健福祉機構

目的：メンタルヘルスの問題への対応は早期介入による効果が大きいとされる。しかしその対応は個別の事後の活動が中心である。人生早期の様々な精神保健上の問題に対して、人生早期から全ての子どもを対象に効果的なメンタルヘルス教育プログラムを導入することを最終的な目標とする。本研究は試行版幼児教育プログラムを教育機関からの意見を通じて評価すること、子どもらの教育ニーズを明らかにすることを目的とする。

方法：目的を達成するため以下二点を実施することとした。

- ① 幼児のメンタルヘルスの問題に対する現状を明らかにする：教諭から見た子ども、保護者、教諭自身のメンタルヘルスの問題に対する接触経験と、状況を探索的に明らかにするための質問項目を作成した。なお項目はメンタルヘルスの専門家 2 名によって作成した。
- ② 幼児期の教育プログラムの効果評価：「こころの状態を知る」「ストレスとは」「感情とは」のテーマでストーリーを織り交ぜた教育プログラムを事前に作成した。それについて改良や工夫すべき点などについて意見を聴取した。

A 県 B 市内の 2 つの幼児教育機関に所属する教諭にアンケートを依頼し承諾が得られた者のみ実施した。尚教諭の経験年数によって偏りがないよう教育機関に配慮を依頼した。

結果：2 つの教育機関の 16 名の教諭に配布し 15 名から回答が得られた(回収率 94%)。

ストレス状況にある子どもの特徴：子どものストレスを教員が感じた経験、対応した経験は全員が「有」と答えた。具体的状況としては「家族関係に問題がありそうな時」(11 名)が最も多かった。具体的内容は「家庭環境の変化(母の妊娠、離婚等)」等の回答が多かった。子どものストレス時の「からだの変化」は頭痛、チック症、頻尿等が報告され「精神面の変化」では泣く、怒り、「言葉の変化」では乱暴になる、どもる、口数が減る、「行動の変化」では攻撃的行動、保育者にくっつく、落ち着きがなくなる、洋服や体(指、爪)を噛む、自慰行為など多様な変化が報告された。

ストレス状況にある保護者の特徴：保護者のストレスを教員が感じた経験、対応した経験は 14 名が「有」と答えた。発生状況等の傾向では育児負担(13 名)保護者自身のメンタルな問題(12 名)が多かった。その対応として「相談の場を設けた」(11 名)や「教員同士での話し合い」(10 名)で、その結果「保護者の肯定的変化を感じた」者(10 名)であった。しかし「保護者への対応に限界を感じた」者(3 名)もいた。これまでに地域の専門機関との連携「有」(8 名)で連携機関は保健所(4 名)児童相談所、発達の専門機関等(3 名)であった。

教育プログラムについての評価：改良する点については「さらに平易な表現にする」(4 名)、「親よりも友人関係とのストーリーが身近でよい」(3 名)などの指摘が得られた。

考察：。幼児教育にあたる教諭らは子どもや保護者の相談の受け手として重要な機能をはたしている。子どもや保護者らと接する中でそれぞれの経験や知識に裏付けながら観察し、早期介入を実践するもののその役割に限界もあると考えられる。作成した教育プログラムについてはまだ改良の余地があるため、今後さらに内容の妥当性を高める必要がある

結論：メンタルヘルスの問題は身近な問題であり、上記現状を踏まえたメンタルヘルス教育の内容構築が必要である。早期介入の役割に教諭は大きな役割を果たすため連携する必要がある。今後最適な予防のあり方を検討する必要がある。

発表予定：日本看護科学学会にて発表(予定)。